

仲間への同調傾性といじめ経験との関連について

西野 泰代

(受付 2016年10月27日)

問題と目的

近年、いじめは、学校現場だけでなく、社会全体において重大な問題の一つであるといっても過言ではないだろう。いじめの問題は、日本特有の現象ではなく、世界中のさまざまな国や地域で起こっており、それぞれの国や地域でその実状に合わせた対応や予防策が講じられている。

いじめに関する国内外の研究を概観すると、いじめ問題の捉え方として大きく二つの視点があると考えられる。ひとつは、「いじめというのはまさに個人のアグレッシブ・ビヘイビア (aggressive behavior, 攻撃的な行動) が問題であり、いじめをする子どもたちには独特のパーソナリティがあるのではないか」というものである。もうひとつは、「いじめが起きる場面では、いじめの加害者と被害者以外に、加害者に加担する者、加害行動を助長するような観衆、無関心を装う傍観者、被害者を助けようとする仲裁者といった様々な役割を担う者たちの存在があり、いじめには集団内の力関係や抑止力が大きくかかわっている」とするものである (森田, 2010; 森田・清永, 1986; Salmivalli, Lagerspetz, Bjorkqvist, Osterman, & Kaukiainen, 1996)。最近では後者の視点に立った研究が徐々に増えてきており、日本においても、国立教育政策研究所が18年間にわたって「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」(文部大臣, 1996) ことを『いじめ追跡調査』により実証してきた (国立政策研究所, 2016)。なぜ、深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうるのであろうか。森田 (2010) は、「いじめは人間の動物としての攻撃性に根ざすものではなく、人間が社会的に作り出す関係性に潜む病理である」と述べ、いじめ場面での「観衆」と「傍観者」がいじめを助長する可能性を示唆した。「観衆」は直接手を下さずともいじめを積極的に是認する姿勢を示し、また、見て見ぬふりをする「傍観者」の態度はいじめている子どもを支持することになり、両者ともに加害者であると指摘された (森田, 2010)。ただし、森田 (2010) は、加害者や観衆と異なり、傍観者はいじめに対して冷ややかな反応を示せばいじめを抑止する存在となりうるが、傍観者が見て見ぬふりをする態度の背景には、「自分が被害者になることへの恐れ」「優勢な力に対する従順さ」「集団への同調志向」などがあり、実際にはいじめを抑止する力となり得ないことも示唆した。一

方で、いじめ被害の多さは、学級内での加害者や観衆の人数よりも傍観者の人数と最も高い相関を示すという調査報告もあり（森田，1990），いじめを抑止するためには，いじめを見て見ぬふりをする傍観者を減らし，いじめ被害者を助けようとする仲裁者を増やすことが肝要だと言えよう。

平成25年に公布された「いじめ防止対策推進法」では，いじめについて「当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって，当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」と定義している。本研究においても，この定義に準じて「いじめ」という概念を扱うが，いじめは一定の人的関係のあるところで生じるとすれば，いじめは仲間集団の中で起きやすいと考えられよう。一般的に，仲間集団とは「ともに事をする人の集まり（広辞苑）」であり，そこには何らかの利害関係が存在する。

Bukowski & Sippola (2001) では，集団における「絆 (cohesion)」，「調和 (harmony)」，「発展 (evolution)」という3つの目標を達成するために，その妨げとなるメンバーを迫害する方向に集団の力が働くことによりいじめは起きるのではないかと推測された。森田 (2010) は，日本におけるいじめの背景には「集団へのロイヤリティや凝集性への圧力」「関係の囲い込み」「異質性の排除」といった日本社会に普遍的に観察されるメカニズムが横たわっている可能性を示唆した。森田・清永 (1986) は，いじめについて「いじめとは，同一集団内の相互作用過程において優位に立つ一方が，意識的に，あるいは集合的に他方に対して精神的・身体的苦痛をあたえることである」と定義したが，「集団的に」という表現に関して，森田 (2010) では，「人々が集まることによって，社会心理学でいう『群集行動』にも似た状況が作り出され…自分も被害に遭うのではないかという不安感から付和雷同していじめる側にまわる場合や，遊びが昂じてみんなでいじめてしまう場合，あるいは相手への苛立ちが場の雰囲気支配して，いじめとなって表れる場合」を意図すると補足説明された。さらに，森田 (2010) では，いじめを止めたり，仲裁したりするには，その場の雰囲気への同調志向を超えるような価値観を子どもたちの中に育成していくことの必要性が指摘された。

仲間への同調傾性

竹村・高木 (1988) は，中学生を対象とした調査結果から，仲間への同調傾性が向社会的行動場面もしくは反社会的行動場面で発現されやすいことを報告し，いじめが深刻化する背景に仲間への同調傾性が関連する可能性を指摘した。仲間への同調傾性 (peer conformity disposition) について，海外では発達の視点を踏まえてこれまでさまざまに議論されてきた (Berndt, 1979; Brown, Clasen, & Eicher, 1986)。小学生から高校生までを対象として仲間への同調傾性の発達の差異を検討した Berndt (1979) は，反社会的な行動に関する仲間へ

の同調傾性は9歳から徐々に高まり、15歳でそのピークを迎えること、親への同調傾性と仲間への同調傾性は負の相関関係にあることを示した。青年期前期の子どもたちに仲間への同調傾向の高まりがみられるのは、親からの心理的離乳を経て自立した大人になる過程での通過点のようなもの (Steinberg & Silverberg, 1986) と考えられており、児童期後半から青年期にかけて、子どもたちは、仲間が実際に何をするのかということより、何を考えているのかということに影響される (Fischhoff, Crowell, & Kipke, 1999)。実際に、我が国でも、榎本 (2003) は、中学生において同質性を重視する友人関係がみられることを報告し、また、土井 (2009) は、友人関係の中で仲間外れにされることを極度に恐れ、友人関係を維持することに涙ぐましいまでの努力をする子どもたちが少なからず存在することを指摘した。

仲間への同調傾性といじめ

いじめに対する肯定的な態度は仲間集団の社会的な文脈の中で発生し (Ojala & Nesdale, 2004)、その背景には仲間への同一嗜好 (homophily) があると考えられている (Cairns, Cairns, Neckerman, Gest, & Gariepy, 1988)。その一方で、周囲にいる者たちが被害者を助けようとする傾向にある学級ではいじめがそれほど起こらないという知見も報告されており (Salmivalli, Voeten, & Poskiparta, 2011)、仲間への同調傾性は、いじめ場面での加害行動への加担と被害者を助けようとする仲裁行動のどちらとも関連する可能性が考えられる。仲間への同調傾性といじめに関するこれまでの研究により、いじめ場面でどう行動するのかについて仲間がお互いに影響をおよぼし合うことやいじめの加害行動と仲間内での同一嗜好との関連については明らかにされてきたが (Espelage, Holt, & Henkel, 2003)、いじめ場面での様々な行動と仲間への同調傾性に関する実証的な研究はほとんど見られない。Brown et al. (1986) は、仲間への同調傾性とピアプレッシャー (peer pressure) とは区別されるべきであり、ピアプレッシャーが態度や認知であるのに対して、仲間への同調傾性は行動上の傾向であると指摘した。しかしながら、我が国において、これまでいじめとピアプレッシャーとの関連についての研究は散見されるものの (竹村・高木, 1988など)、ピアプレッシャーと仲間への同調傾性とが明確に区別されておらず、時には混同されて用いられている。仲間への同調傾性が向社会的行動場面もしくは反社会的行動場面で発現されやすい (竹村・高木, 1988) という報告もあり、いじめ問題を考えるうえで、子どもたちの行動を左右すると考えられる「仲間への同調傾性」について検討することは、非常に意義のあることであろう。

そこで、本研究では、仲間への同調傾性の高まりがみられる (Berndt, 1979) 児童期後半から青年期前期の小中学生を対象として、まず、子どもたちの仲間への同調傾性を測定する尺度を作成したうえで、仲間への同調傾性といじめ経験 (本研究では加害行動と傍観行動を取り上げる) との関連について発達的な視点も含めて検討することを目的とする。

仲間への同調傾性尺度の信頼性および妥当性の検討

先行研究より、仲間への同調傾性は、ピアプレッシャーや抑うつ気分と正の、セルフエスティームや自己効力感と負の関連を有することが明らかとなっており (Brown et al., 1986; Kiran-Esen, 2012; Kosten, Scheier, Grenard, 2012), 本研究で作成する仲間への同調傾性尺度についても同様の関連が得られると予想される。そこで、本研究では、併存的妥当性の検討として、ピアプレッシャー、自己価値感、自己受容感を取り上げ、仲間への同調傾性尺度との関連を検討する。

方 法

調査対象および調査時期

H 県内の小学校 3 校および中学校 2 校に対し、2015 年 7 月に質問紙調査を実施した。有効回答者は小学 4 年生から中学 3 年生まで計 728 名 (小学生 230 名 (平均年齢 10.26 歳, SD = 0.94, 女子 55.2%), 中学生 498 名 (平均年齢 13.26 歳, SD = 0.97, 女子 50.0%)) であった。

調査手続き

調査に先立ち、教育委員会を通じて調査の趣旨等を各学校長らに説明した後、各学校に調査を依頼した。調査用紙は学校で配布されたが、実施は持ち帰りによる方法をとった。各家庭には調査の趣旨を説明する文書を配布し、調査への協力は本人の自由意志に任せた。回収は学校で行われたが、回答内容の秘密保持のため、質問用紙とともに配布された封筒に入れて厳封した上で提出するよう依頼した。

調査内容

仲間への同調傾性尺度 Berndt (1979), Santor, Messervey, & Kusumakar (2000) を参考に、現代の日本の子どもの実情を反映した「仲間への同調傾性」を表現する 10 項目を新たに作成した。作成された項目群は「仲間内で「いいね」と言われている音楽を聴く」「他の子が使っているような流行語を自分も使ってみる」などであった (項目内容については Table 1 を参照)。各項目について「非常にあてはまる (5 点)」「ややあてはまる (4 点)」「どちらともいえない (3 点)」「ややあてはまらない (2 点)」「全くあてはまらない (1 点)」のうち、自分の気持ちに近い数字 1 つに丸をつけるよう教示して回答を求めた。

(いじめ場面における) 加害行動と傍観行動 岡安・高山 (2000) において、いじめの加害を測定する項目として使用された 3 項目と、傍観行動 3 項目 (「だれかが、わざとぶつかわれたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、けられたりするのをだまってみていた」「だれかが、らくがきをされたり、物をかくされたりするのをだまってみていた」「だれかが、仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われるのをだまってみていた」) につい

てそれぞれ過去3か月間にそのような行動がどのくらいあったかどうか4件法（1：一度もなかった～4：何度もあった）でたずねた。

ピアプレッシャー 仲間からの同調圧力を感じる程度を測定する8項目（Nishino, 2015）（「友だちにからかわれると思うと、本当のことを言えない」「周りの人の意見に流されやすい」など）を用いて4件法（1：全くあてはまらない～4：非常にあてはまる）で回答を求めた。

自己価値 Harter（1982）を基に、松井・村田（1997）が作成した「全体的自己価値尺度」の中から、松尾（1999）が小学生を対象に実施した調査で用いられた5項目（「自分に自信があります」「今の自分のままでいいです」「自分のすることに満足しています」「私は、よい人間だと思います」「今の自分の生き方や生活でよいと思います」）を用いた。各項目に対して4段階（1：全然あてはまらない～4：とてもあてはまる）で回答させた。

自己受容 高坂（2011）で作成された共同体感覚尺度の中の自己受容下位尺度6項目（「自分自身に納得している」「今の自分を大切にしている」など）を用いて5件法（1：全くあてはまらない～5：非常にあてはまる）で回答を求めた。

結 果

仲間への同調傾性尺度の構成および信頼性分析

仲間への同調傾性を測定する10項目について主成分分析を実施したところ、第一主成分に対する主成分負荷量が低い1項目（「友だちが望めば、映画を見に行く」）が確認されたため、これを削除し、9項目についてあらためて主成分分析を実施した（Table 1）。その結果、第一主成分に対する寄与率は41.89%であり、いずれの項目においても、第一主成分に対す

Table 1 仲間への同調傾性尺度の主成分分析ならびに確認的因子分析結果

項目番号	項 目	主成分負荷量	確認的因子分析における因子負荷量
10	友だちがどのように行動するのか気になる	.68	.64
6	しばしば自分を友だちと比較する	.68	.63
7	他の子が着ているような洋服を着るようにしている	.67	.61
9	他の子とどう関わっていいかわからない時には、その子たちを観察して手がかりを探す	.67	.62
5	他の子が使っているような流行語を自分も使ってみる	.65	.58
2	仲間内でカッコいいと思われている髪型にする	.65	.58
8	一緒にいる仲間に合わせて自分にとって重要だ	.65	.59
3	友だちが面白いので、うわさを流す	.60	.53
4	仲間内で「いいね」と言われている音楽を聴く	.56	.49

る主成分負荷量が .56以上であった。次に、仲間への同調傾性尺度 9 項目について、最尤法による確認的因子分析を行った。その結果、いずれの適合度指標においても、おおむね十分な値が得られ ($\chi^2 = 306.10, df = 27, p < .001, RMR = .089, GFI = .909$)、それぞれの項目について .49以上の因子負荷量を示した (Table 1)。さらに、仲間への同調傾性尺度 9 項目について、Cronbach の α 係数を算出したところ .82であり、十分な内的整合性が確認された。

仲間への同調傾性尺度の記述統計量

仲間への同調傾性尺度について、調査対象者全体、学年別および性別の平均値と標準偏差を算出した。その結果、調査対象者全体の平均値と標準偏差 (括弧内が標準偏差の値) は 2.46 (.73) であった。学年別では小学 4 年生が 2.24 (.76)、小学 5 年生が 2.24 (.76)、小学 6 年生が 2.24 (.76)、中学 1 年生が 2.24 (.76)、中学 2 年生が 2.24 (.76)、中学 3 年生が 2.57 (.70) であった。性別では、男子が 2.41 (.78)、女子が 2.51 (.68) であった。学年ごとの平均値を男女別に Figure 1 に示す。

次に、仲間への同調傾性尺度について、学年差および性差を検討するため、2 要因分散分析を行った (Table 2)。その結果、学年差と性差の双方に有意な主効果が得られ (学年別 $F(5, 715) = 7.96, p < .001$; 性別 $F(1, 715) = 4.64, p < .05$)、中学 2 年生と 3 年生は、小学 4 年、5 年、6 年生より有意に得点が高く、中学 1 年生は小学 4 年と 6 年生より有意に得点が高かった。また、男子に比べて女子の得点が有意に高かった。交互作用については有意でなかった。これらの結果から、以降の分析では、学校段階別および性別により分析を行うこととした。

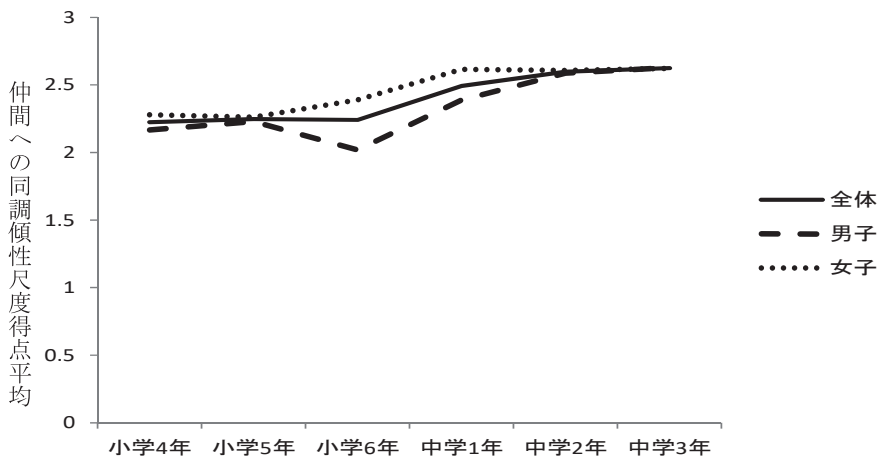


Figure 1 男女別学年ごとの同調傾性尺度得点平均値

Table 2 男女学年別の記述統計量と分散分析結果

		小学4年	小学5年	小学6年	中学1年	中学2年	中学3年	主効果		交互作用
								学年別	性別	
男子	M (SD)	2.17(0.94)	2.23(0.70)	2.02(0.82)	2.39(0.70)	2.59(0.87)	2.63(0.66)			
	N	43	28	31	100	58	91			
女子	M (SD)	2.28(0.75)	2.26(0.75)	2.39(0.61)	2.62(0.64)	2.61(0.67)	2.62(0.65)	7.96***	4.64*	1.12
	N	45	36	46	85	68	96			

* $p<.05$, *** $p<.001$

仲間への同調傾性尺度と他の尺度との関連

仲間への同調傾性尺度の併存的妥当性を検討するために、同尺度と自己価値、自己受容、ピアプレッシャーの各尺度との関連を学校段階別および男女別にそれぞれ算出した (Table 3)。その結果、ピアプレッシャー尺度と仲間への同調傾性尺度との間に .45前後の有意な正の関連 (小中学生男女ともに $p<.001$) が認められた。また、小中学生ともに女子において自己価値尺度と弱いながらも負の有意な相関係数 (小学生 $p<.05$, 中学生 $p<.01$) が、中学生女子においては自己受容尺度においてやや弱い有意な負の相関係数 ($p<.01$) がそれぞれ得られた。

Table 3 仲間への同調傾性尺度と各変数の相関関係

	同調傾性尺度			
	小学生		中学生	
	男子	女子	男子	女子
ピアプレッシャー	.43***	.47***	.46***	.53***
自己価値	.09	-.20*	.02	-.20**
自己受容	.06	-.02	.03	-.17***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

仲間への同調傾性尺度といじめ経験との関連

仲間への同調傾性尺度得点の高さといじめ経験との関連について検討するため、仲間への同調傾性尺度得点の平均値 (全体2.5/小学生2.2/中学生2.6) により学校段階別および性別でそれぞれ高低2群に分けて t 検定を行った (Table 4, 5)。

Table 4 学校段階別の仲間への同調傾性尺度得点平均値、標準偏差および *t* 検定の結果

	小学生			中学生		
	同一傾性高群 (<i>N</i> =121)	同一傾性低群 (<i>N</i> =109)	<i>t</i> 値	同一傾性高群 (<i>N</i> =273)	同一傾性低群 (<i>N</i> =223)	<i>t</i> 値
友だちといっしょになって、だれかを、仲間はずれにしたり、無視したり、かげで悪口を言ったりした	1.17(.51)	1.04(.19)	2.74**	1.27(.68)	1.09(.43)	3.56***
友だちといっしょになって、だれかに、らくがきをしたり、物をかくしたりした	1.03(.22)	1.00(.00)	<i>n.s.</i>	1.05(.29)	1.03(.28)	<i>n.s.</i>
友だちといっしょになって、だれかに、わざとぶつかったり、遊ぶふりをしてたいたり、けったりした	1.10(.40)	1.01(.10)	2.42*	1.11(.48)	1.07(.36)	<i>n.s.</i>
だれかが、仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われたりするのをだまってみていた	1.21(.60)	1.10(.41)	<i>n.s.</i>	1.18(.54)	1.09(.42)	1.99*
だれかが、らくがきをされたり、物をかくされたりするのをだまってみていた	1.11(.46)	1.06(.41)	<i>n.s.</i>	1.07(.37)	1.03(.23)	<i>n.s.</i>
だれかが、わざとぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、けられたりするのをだまってみていた	1.13(.50)	1.10(.41)	<i>n.s.</i>	1.11(.42)	1.09(.42)	<i>n.s.</i>

p*<.05, *p*<.01, ****p*<.001

先ず、学校段階別 (Table 4) では、小中学生ともに「友だちといっしょになって、だれかを仲間はずれにしたり、無視したり、かげで悪口を言ったりした」という項目について同調傾性得点の高い群は低い群に比べて有意に得点の高いことが示された (小学生 $t(1, 155) = 2.74, p < .01$; 中学生 $t(1, 464) = 3.56, p < .001$)。さらに、小学生では「友だちといっしょになって、だれかに、わざとぶつかったり、遊ぶふりをしてたいたり、けったりした」という項目について ($t(1, 135) = 2.42, p < .05$)、中学生では「だれかが、仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われたりするのをだまってみていた」という項目について ($t(1, 491) = 1.99, p < .05$)、それぞれ仲間への同調傾性得点の高い群は低い群に比べて有意に項目得点の高いことが示された。

次に、性別による結果 (Table 5) から、男女ともに「友だちといっしょになって、だれかを仲間はずれにしたり、無視したり、かげで悪口を言ったりした」という項目について同調傾性得点の高い群は低い群に比べて有意に項目得点の高いことが示された (男子 $t(1, 300) = 2.04, p < .05$; 女子 $t(1, 319) = 4.17, p < .001$)。さらに、女子では「だれかが、らくがきをされたり、物をかくされたりするのをだまってみていた」を除くその他すべての項目について、それぞれ仲間への同調傾性得点の高い群は低い群に比べて有意に項目得点の高いことが示された。

Table 5 男女別の仲間への同調傾性尺度得点平均値，標準偏差および *t* 検定の結果

	男子			女子		
	同一傾性高群 (<i>N</i> =179)	同一傾性低群 (<i>N</i> =172)	<i>t</i> 値	同一傾性高群 (<i>N</i> =205)	同一傾性低群 (<i>N</i> =170)	<i>t</i> 値
友だちといっしょになって，だれかを，仲間はずれにしたり，無視したり，かげで悪口を言ったりした	1.15(0.51)	1.06(0.32)	2.04*	1.33(0.73)	1.09(0.39)	4.17***
友だちといっしょになって，だれかに，らくがきをしたり，物をかくしたりした	1.06(0.34)	1.04(0.31)	<i>n.s.</i>	1.03(0.20)	1.00(0.00)	2.14*
友だちといっしょになって，だれかに，わざとぶつかったり，遊ぶふりをしてたいたり，けったりした	1.16(0.55)	1.08(0.38)	<i>n.s.</i>	1.08(0.39)	1.01(0.08)	2.60*
だれかが，仲間はずれにされたり，無視されたり，かげで悪口を言われたりするのをだまっていた	1.15(0.51)	1.09(0.44)	<i>n.s.</i>	1.22(0.59)	1.11(0.41)	2.09*
だれかが，らくがきをされたり，物をかくされたりするのをだまっていた	1.08(0.41)	1.05(0.34)	<i>n.s.</i>	1.09(0.40)	1.03(0.25)	<i>n.s.</i>
だれかが，わざとぶつかられたり，遊ぶふりをしてたたかれたり，けられたりするのをだまっていた	1.15(0.51)	1.13(0.50)	<i>n.s.</i>	1.11(0.45)	1.03(0.17)	2.46*

p*<.05, **p*<.001

考 察

本研究では，仲間への同調傾性を測定する尺度を新たに作成したうえで，仲間への同調傾性について小学4年生から中学3年生までの発達を確認し，さらに，いじめ場面での加害行動および傍観行動の経験と仲間への同調傾性との関連について検討した。以下，その結果について考察する

仲間への同調傾性尺度の作成

本研究で作成された仲間への同調傾性尺度は，主成分分析の結果，9項目のいずれも第一主成分に対して高い負荷量を示し，また，確認的因子分析の結果，適合度指標においておおむね十分な値を示したことで1因子構造であることが確認された。この結果に基づいて，仲間への同調傾性の学年差および男女差を検討したところ，双方ともに有意な差が確認され，中学生の得点が小学生の得点に比べて有意に高く，また，女子の得点が男子の得点に比べて有意に高かった。Berndt (1979) は，反社会的な行動に関する仲間への同調傾性が9歳から徐々に高まり，15歳でそのピークを迎えることを示唆したが，本研究の結果もそれに準じるものであったと言えよう。一方で，Berndt (1979) は，反社会的な行動に関して女子よ

りも男子のほうが仲間への同調傾性の得点が有意に高いことを示しており、その点において本研究の結果とは異なるものであった。Brown et al. (1986) では、人をだましたり、盗みをしたり、物を壊すといった反社会的な行動に対する仲間への同調傾性について男子のほうが女子に比べて有意に高いことが示され、それと同時に、食事場所や何をして遊ぶかを決めるといった中立的な行動に対する仲間への同調傾性について有意な性差は確認されなかったことが報告された。本研究で測定された仲間への同調傾性は、反社会的な行動を含んだものではなく、一般的な、もしくは中立的ともいえるものであった。そうしてみると、女子の仲間への同調傾性得点が男子に比べて有意に高いことが示された本研究の結果は、Brown et al. (1986) で示された結果とも異なるものであったと言えよう。

土井 (2014) は、価値観が多様化した現代において、相互に異なった価値観を調整するため、これまで以上に高いコミュニケーション能力が要求されており、若者たちは、高いコミュニケーション能力の証としての豊かな人間関係を希求し、つねに誰かとつながっていないと安心できなくなっていることを指摘した。また、中学生女子の友人関係では親密確認活動が多くみられ、仲間内での同調行動が増える傾向にある (榎本, 1999; 落合・佐藤, 1996) という先行研究の知見もあり、本研究での結果はそれらの知見を実証的に裏付けるものであったと言えるかもしれない。本研究では、仲間への同調傾性尺度を作成する過程で他の尺度との併存的妥当性を確認したが、小中学生ともに女子においてのみ仲間への同調傾性と自己価値との間に有意な負の関連、中学生女子においては仲間への同調傾性と自己受容との間にも有意な負の関連が示されたことから、自分自身に対するネガティブな認知が仲間への同調傾性を高める可能性も否定できないだろう。中学生女子の友人関係で親密確認行動が多くみられる (榎本, 1999) のは、自分自身に対する自信の無さの表れなのかもしれない。

仲間への同調傾性といじめ経験との関連

本研究では、いじめ場面での加害行動および傍観行動の経験と仲間への同調傾性との関連について検討した結果、学校段階別および性別にかかわらず、「友だちといっしょになって、だれかを仲間はずれにしたり、無視したり、かげで悪口を言ったりした」という項目について仲間への同調傾性得点の高い群は低い群に比べて有意に項目得点の高いことが示され、仲間への同調傾性の高い子どもたちは、同調傾性の低い子どもたちと比べて、いじめ場面において加害行動に加担しやすい可能性が示唆された。しかしながら、仲間への同調傾性高群であっても加害行動得点は1.15-1.33の範囲であり、経験が一度もないか、あるいは一度だけあった生徒がほとんどだと考えられる。一方で、中学2年生を対象としていじめ体験の心理的特徴について検討した石田・中村 (2013) では、加害のうち、男子では2割、女子では3割を超える生徒が「無視・仲間外れ」を経験したことが報告されており、中学生のいじめ加害行動の多くを「無視・仲間外れ」が占めるという事実も無視できないだろう。本研究の結

果から、仲間への同調傾性の高さが「無視・仲間外れ」の加害行動を助長する可能性を予測できるとすれば、仲間への同調傾性に焦点をあてた介入を行うことでいじめの加害行動を抑制することにつながるかもしれない。

さらに、性別による分析結果から、女子では、「だれかが、仲間はずれにされたり、無視されたり、かげで悪口を言われたりするのをだまってみていた」「だれかが、わざとぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、けられたりするのをだまってみていた」という傍観行動について仲間への同調傾性の高低による有意な差が示され、仲間への同調傾性が高い女子は低い女子に比べて有意に傍観行動の多い可能性が示唆された。榎本（1999）は、女子の友人との付き合い方には、友人との趣味や行動の類似性を重視する「親密確認行動」が多くみられること、そして、行動や趣味の類似性で友人関係を保とうとするような表面的なつきあい方であっても、中学生女子にとってはそれが相互の信頼と安定をもたらすことを指摘した。また、土井（2014）は、今日のように価値観の多様化した社会の中では、他者からの評価に度々食い違いが生じることで自己評価が安定せず、自分を評価してくれる仲間の存在が自尊感情を支える最大の基盤であり、それゆえ、子どもたちは周囲からの反応を絶えず探り、それを自分の態度決定に有効な羅針盤とせざるを得ない状況のあることを指摘した。こうしてみると、現代の子どもたちにとって、仲間への同調は子ども社会の中でうまくやっていくための方策のひとつであり、男子よりも女子の方がそれを敏感に察知して行動しているのかもしれない。実際のところ、仲間への同調が精神的健康や環境への適応とどう関連するかについては今後さらに検討すべき課題であろう。

今後の課題

本研究では、1時点での横断データから仲間への同調傾性の発達について検討したため、コホートの特性などを排除した仲間への同調傾性そのものの発達については明らかに出来ない。また、本研究では仲間への同調傾性といじめ経験との相関分析にとどまったため、仲間への同調傾性という個人の行動特性がどのような環境の中で形成されるのかについては検討できていない。今後、いじめなど対人関係における問題に対する効果的な介入を考えるうえで、子どもたちが過度に仲間への同調傾性を高めることなく、健全な発達を遂げるための要因について縦断データを収集して因果の流れを探っていく必要があるだろう。

引用文献

- Berndt, T. J. (1979). Developmental changes in conformity to peers and parents. *Developmental Psychology*, 15, 608–616.
- Brown, B. B., Clasen, D. R., & Eicher, S. A. (1986). Perceptions of peer pressure, peer conformity dispositions, and self-reported behavior among adolescents. *Developmental Psychology*, 22, 521–530.

- Bukowski, W., & Sippola, L. (2001). Groups, individuals, and victimization: A view of the peer system. In J. Juvonen & S. Graham (Eds.), *Peer harassment in school. The plight of the vulnerable and victimized* (pp. 355-377). New York: Guilford Press.
- Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Gest, S. D., & Garipey, J. L. (1988). Social networks and aggressive behavior: Peer support or peer rejection? *Developmental Psychology*, 24, 815-823.
- 土井隆義 (2009). キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像 岩波書店
- 土井隆義 (2014). つなかりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える 岩波書店
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 (2003). 青年期の友人関係の発達的变化——友人関係における活動・感情・欲求と適応—— 風間書房
- Espelage, D. L., Holt, M., & Henkel, R. (2003). Examination of peer-group contextual effects on aggression during early adolescence. *Child Development*, 74, 205-220.
- Fischhoff, B., Crowell, N. A., & Kipke, M. (1999). Adolescent decision making: Implications for prevention programs. Washington, DC: National Academies Press.
- Harter, S. (1982). The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- 石田靖彦・中村友一 (2013). 中学生のいじめ体験に関する研究——いじめの立場における心理的特徴 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 3, 123-130.
- Kiran-Esen, B. (2012). Analyzing peer pressure and self-efficacy expectations among adolescents. *Social Behavior and Personality*, 40, 1301-1310.
- 国立政策研究所 (2016). いじめ追跡調査 2013-2015 生徒指導・進路指導研究センター
- 高坂康雅 (2011). 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究, 59, 88-99.
- Kosten, P. A., Scheier, L. M., & Grenard, J. L. (2012). Latent class analysis of peer conformity: Who is yielding to pressure and why? *Youth and Society*, 45, 565-590.
- 松井 仁・村田純子 (1997). 青年用有能感調査票の検討 教育心理学研究, 45, 220-227.
- 松尾直博 (1999). 児童用自己価値・他者価値尺度の作成および信頼性, 妥当性の検討 東京学芸大学紀要 I 部門, 50, 75-80.
- 文部大臣 (1996). いじめの問題に関する文部大臣緊急アピールについて 文部省
- 森田洋司 (1990). 家族における私事化現象と傍観者心理 現代のエスプリ, 271, 110-118. 至文堂
- 森田洋司 (2010). いじめとは何か 中公新書
- 森田洋司・清永賢二 (1986). いじめ——教室の病 金子書房
- Nishino, Y. (2015). Bystander behavior in bullying: The role of personal characteristics and perceived peer pressure. 14th European Congress of Psychology.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Ojala, K., & Nesdale, D. (2004). Bullying and social identity: The effects of group norms and distinctiveness threat on attitudes towards bullying. *British Journal of Developmental Psychology*, 22, 19-35.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- Salmivalli, C., Lagerspetz, K., Bjorkqvist, K., Osterman, K., & Kaukiainen, A. (1996). Bullying as a group process: Participant roles and their relations to social status within the group. *Aggressive behavior*, 22, 1-15.
- Salmivalli, C., Voeten, M., & Poskiparta, E. (2011). Bystanders matter: Associations between reinforcing, defending, and the frequency of bullying behavior in classrooms. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 40, 668-676.
- Santor, D. A., Messervey, D., & Kusumakar, V. (2000). Measuring peer pressure, popularity, and conformity in adolescent boys and girls: Predicting school performance, sexual attitudes, and substance abuse. *Journal of Youth and Adolescence*, 29, 163-182.
- Steinberg, L., & Silverberg, S. (1986). The vicissitudes of autonomy in early adolescence. *Child Development*, 57, 841-851.

西野：仲間への同調傾性といじめ経験との関連について

竹村和久・高木 修 (1988). “いじめ”現象に関わる心理的要因——逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性—— 教育心理学研究, 36, 57-62.

〈本研究はJSPS 科研費26380913の助成を受けて実施された。〉

Summary

Relation between Peer Conformity and Bullying

Yasuyo Nishino

In the present study, the Peer Conformity Scale (PCS) was developed, and relationships between peer conformity and bullying behaviors were investigated. The sample consisted of two hundred and thirty Japanese elementary school students (mean age =10.26 years) and four hundred and ninety-eight junior high school students (mean age =13.26 years). Principal component analysis and confirmatory factor analysis indicated that PCS was composed of 9 items with a 1-factor model. The internal consistency of the scale was shown by calculating Cronbach's α , and its concurrent validity was demonstrated by evidence that PCS was correlated positively with peer pressure, and negatively with self-worth and self-acceptance. The girls scored higher than the boys on peer conformity.

Further, the results showed the higher peer conformity girls have, the more they might take bullying behaviors. Implications of these findings are discussed.

<This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 26380913.>

【key words】 peer conformity, bullies, passive bystanders, late childhood, early adolescence

